

10th
東西四大学OB合唱連盟演奏会



稲門グリークラブ
 新月会
 慶應義塾ワグネル・ソサイエティーOB合唱団
 クローバークラブ

1995.7.16(Sun)
 ザ・シンフォニーホール
 13:30開演

V 合同演奏

「エピローグに見る、多田武彦の世界」

花 火	男声合唱組曲「雪と花火」より	作曲指揮	多田武彦
雪 夜	男声合唱組曲「雪明りの路」より	作詩	北原白秋
さくら散る	男声合唱組曲「草野心平の詩から」より	作詩	伊藤 整
エリモ岬	男声合唱組曲「北斗の海」より	作詩	草野心平

「合同演奏の指揮を仰せ付かって」



男声合唱組曲を書き続けて今年で41年。此処まで来ることが出来たのは、作曲家清水脩先生のほか、多くの先生がたから受けたご薫陶の賜物だと思っている。また同時に、私の拙い作品を、名演奏で歌い広めていただいた多くの合唱愛好の諸兄のご好意に、心から感謝の念を捧げたい。

就中、関西学院グリークラブ、慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団、同志社グリークラブ、早稲田大学グリークラブ(五十音順。以下略して、関学グリー、慶應ワグネル、同志社グリー、早大グリーという)の四大学合唱団やそのOB合唱団との折々の思い出は、合唱を始めてこのかた五十年近い私の人生ノートに、克明に刻み込まれている。この演奏会のメッセージを書かせていただく機会に、その一端を綴ってみることにした。

1947年、旧制大阪高等学校に入学後、コーラス部に入ったものの、合唱を初めて知った私には、合唱音楽の良さなど判らう筈はなく、時折混声合唱をともしする大阪府立女子専門学校(現・大阪女子大学)や帝塚山女子高等学校の清楚な装いに、片思いをしていた。

1949年になると、学制改革のため旧制高校の制度も無くなり、三年生だけの授業だけがおこなわれた。当然、部活動も停止した。ある日、校舎の入口のコーラス部の郵便受けに、一通の書状が投函されていた。1949年5月5日開催の、関学グリー50周年記念演奏会の招待状である。ぶらりと行ってみた。最初はやはり良く解らなかった。しかし曲目が、シューベルトの「夜」に差しかった時、事態は急変した。和声学は知っていても「外車のクラクションの二声のハーモニー」しか聞いていなかった私は「和音の持つ色彩美」に身震った。ステージではメンデルスゾーン「霊泉」、ハイドンの「お留守居」、スピリチュアルの「Keep in the Middle of the Road」などが続き、林雄一郎先生がその基礎を確立された「ア・カペラ男声合唱の奥義」に酔い痴れた。

1950年、京都大学に進み、合唱団に入ると、今度は、関西のもう一つの雄、同志社グリーの演奏を聴く機会が多くなった。当時は響きの良い栄光館で、日下部吉彦氏の指揮による「宗教曲」「日本古謡」「スピリチュアル」などの名演奏に陶酔した。この時以来、どういふ訳か、同志社グリークラブの音色が「深く美しい藍色」を想像させる。イタリーの名窯リチャード・ジノリの食器の一つ「ミュゼオ」(フィレンツェの博物館の天井の、円形の明かり取り窓のデザインを模した食器類)の染め付けを見る度に、栄光館での同志社グリーによる宗教曲の、深遠な演奏が、私の心に響きわたる。

1952年、京大男声合唱団は初めて、慶應ワグネル、早大グリーと合唱交歓会を持った。慶應ワグネルは三十名ほどの小編成であったが、後のダーク・ダックスの諸氏もまだ現役の学生で、当時の学生指揮者田中孝氏指揮の見事なアンサンブルによる「埴生の宿」と「フィンランディア」は、今も心に残る。早大グリーは逆に大人数で、当時の学生指揮者坪井秀夫氏指揮により、エマーソンの「狩りの歌」や、スピリチュアルの「ジェリコの戦い」を、「これぞ男声合唱！」とばかりに歌い上げ、京大勢を圧倒した。

1960年、慶應ワグネルは畑中良輔先生を常任指揮者に迎え、一躍表現力が多彩となり、演奏の奥行きを広げた。

1961年、慶應ワグネルからの委嘱作品「草野心平の詩から」を作曲中、詩人へ質問の必要が生じ、電話で草野心平先生と初めて話が出来た。

一方1968年、早大グリーからの二度目の委嘱作品に、草野心平先生の海の詩を選んだが、組曲の標題が浮かばない。意を決して草野先生にお会いして標題を求めたところ、即座に、「北斗の海」と名付けられた。因らずも、慶應ワグネルと早大グリーからの作品委嘱が縁で、草野先生とお話し、お会いする機会が出来た訳だが、草野先生も歌曲の作曲について、一言申された。

「作曲家の先生がたの一部には、音を大事にされるせいか、詩自体の持っている抑揚や精神に無頓着に作曲される人がいる。ひどいになると、詩人にとっては大切な詩の一部を、無断で割愛する人がいる。多田君は、詩人の魂を汲み取ろうとして、良く質問してくるので、出来上がった作品も抵抗無く聴くことが出来るが………」と。清水先生や草野先生の、歌曲についてのご教示と、慶應ワグネル・早大グリーの名演奏のお陰で、私の「草野心平シリーズ」は、その後も好調である。

ここに書かせていただいたエピソードは、ほんの一部に過ぎない。それほど、東西四連傘下の各大学合唱団やそのOB合唱団とお付き会いは、永く深くなった。一昨年長期療養以降、これらの合唱団の演奏会に出かける機会が少なくなったが、いただいた演奏会のCDを聴いては、富岡鐵齋描く水墨画とオーバーラップさせて、男声合唱のモノトーンの凄絶を噛み締めている。

合同演奏の指揮を仰せ付かって感慨も一入。心から御礼を申し上げますと共に、各合唱団の益々のご発展と、メンバー諸兄の弥栄をお祈りする。